オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

チカラシバ

オプション教材チカラシバ 読解マラソン集

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

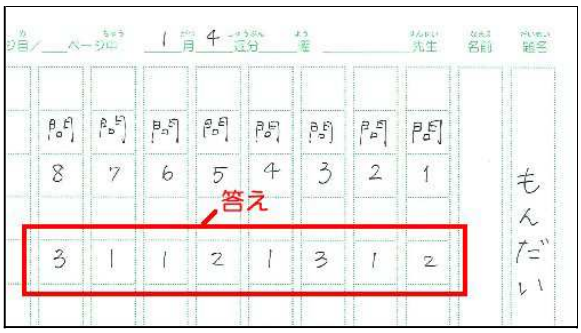
読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

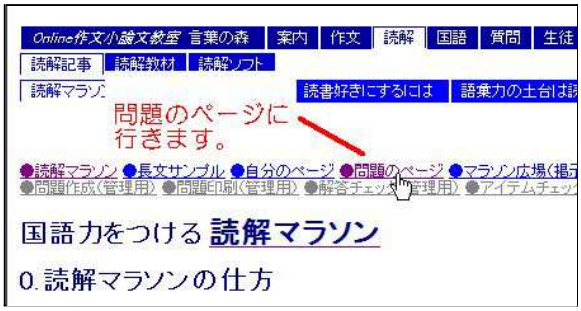
読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

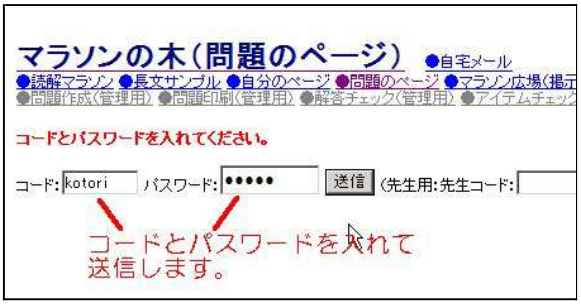
▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

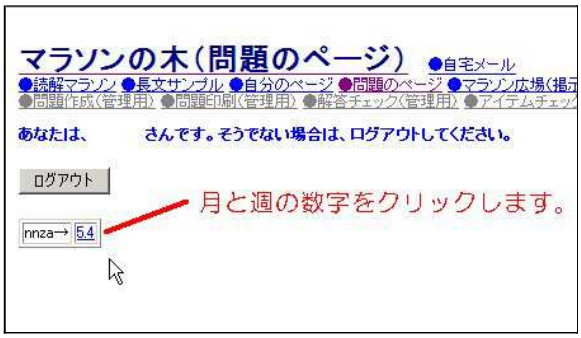


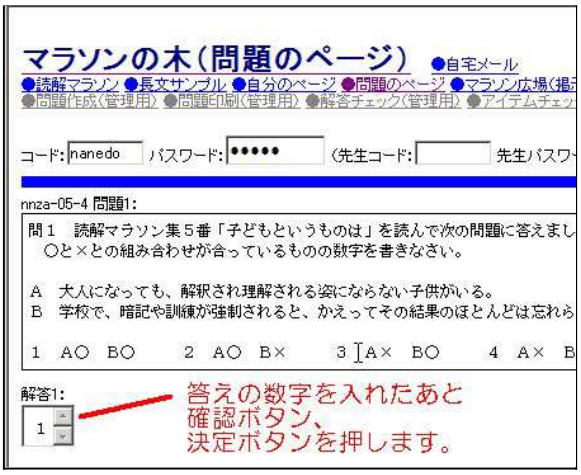
▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

1.

2.


3.


4.


5.


吾一はそとへ遊びに行きたかったが、あいにく、おっかさんもいないので、買ってきたものを、置きっぱなしにして行くわけにはいかなかった。こんなにしていると、焼きイモがつめたくなってしまう。彼はさめないようにと思って、袋のままふところに入れて、あっためていた。しかし、おとっつぁんも、おっかさんも、なかなか帰ってこなかった。

と、えりとえりの合わせ目から、なんともいえない香ばしいにおいが、ほど合いのあったかさを持って、ぽうっとのぼってくる。吾一は大いに誘惑を感じたが、思いきって、両方のえりをぴしんとかき合わせて、顔を横のほうに向けていた。それでも、あごの下のほうから、香ばしいにおいがあがってきたが、彼は目をつぶって、がまんをしていた。すると、今度は焼きイモのぬくもりで、おなかがだんだんあったかくなってきた。あったかになってくると、腹がときどきガマのように、グーと、うなりだした。

そのころ、吾一はおやつをたべていなかったから、わけても腹がすいていた。お小づかいをもらわないわけではないけれども、小づかいはなるたけ貯金するようにと、学校の先生から言われて以来、それを実行しているのである。しかし、三時ごろになると、毎日おなかがすいてたまらなかった。けれども、そこを我慢して、小づかいをつかわないようにしなくてはいけないのだと思って、こらえているのである。しかも、これをたべたところで、貯金は少しもへるわけではない。あごの下からは、あい変わらず香ばしいにおいが鼻を突いてきた。焼きイモのにおいというものは、特別、鼻を刺激する。

「おだちんに、一つぐらい、いいだろう。」

とうとう、こらえられなくなって、吾一は袋の中に手を突っこんだ。

きょうのは丸やきなので、わけてもうまかった。彼は夢中で一つたいらげてしまった。一つたべると、前よりかえって食欲が増してくる。と、ひとりでに手がふところの中にはいって、また一つ取り出した。さっきの焼きイモ屋での不愉快なことなんか、もうすっかり忘れてしまっていた。

そして、一つ、二つとたべているうちに、一銭ぐらいの焼きイモは、いつのまにかなくなって、ふところの中は、新聞がみの袋だけになってしまった。

ぺしゃんこになっている袋が、指のさきにさわった時、吾一は言いようのない寂しさにおそわれた。彼は泣きだしたいような気もちになった。そして、ふところの新聞がみの袋を引っぱり出して、はしのほうを、わけもなく、ちぎっていた。

（山本有三　「路傍の石」）

煙突の上のほうが、ぜんぶ燃えあがっていました。芯にしてあった棒が燃えているのです。つよい風にあおられた炎が、いまにも屋根にうつりそうに長い舌をのばしていました。かあさんは、長い棒をひっつかむと、ゴーゴーと燃えあがる火をむちゅうでたたきつづけ、炎をあげている木ぎれが、かあさんのまわりにどんどんおちていきました。

ローラはどうしていいかわかりませんでした。自分も棒をひっつかみましたが、かあさんにそばへよってはいけないととめられました。火は、ものすごいいきおいで、ゴーゴー音をたてて燃えています。いまにも家が燃えつくすかもしれないのに、ローラにはどうすることもできないのです。

ローラは家にかけこんでいきました。燃えている木や石炭が、煙突からおちてきて、炉辺にころがりでています。家のなかはけむりでいっぱいでした。まっかに焼けた大きな木ぎれが、床にころがりでてきました。メアリイのスカートのすぐそばです。メアリイは動くこともできません。すっかりおびえきっているのです。

ローラは、考えるひまもないほど、こわさでいっぱいでした。いきなり重いゆり椅子の背をひっつかむと、力のかぎりひっぱりました。椅子は、メアリイとキャリーをのせたまま、床をすべるようにあとへさがりました。ローラが、燃えている木ぎれをひっつかんで暖炉にほうりこむのと同時に、かあさんが家へはいってきました。

「えらい、えらい、ローラ。火のついたものが床におちたとき、ほっといてはいけないといったのをよくおぼえていて」

かあさんはそういうと、バケツをとって、手早く、でも静かに、暖炉の火に水をかけました。水蒸気がもうもうとあがります。

「手にやけどをした？」かあさんはローラの手をしらべましたが、ローラは燃えている木ぎれをおおいそぎで投げこんだので、やけどはしていませんでした。

ローラは、もう大きいから泣いたりはしないので、ほんとに泣いているわけではありませんでした。ただ、両ほうの目からひとつぶずつ涙がこぼれ、のどがきゅっとつまっているだけで、それは泣いているのとはちがいます。ローラはかあさんにしがみついて、ぴったり顔をくっつけてかくしてしまいました。かあさんが、火事でけがをしなかったのが、ローラはうれしくてたまらないのです。

「泣かないのよ、ローラ」かあさんはローラの頭をなでながらいいます。「こわかったかい？」

「ええ」ローラはいいます。「メアリイとキャリーが焼けちまうんじゃないかと思ってこわかったの。家が焼けてしまって、住む所がなくなるんじゃないかと思って。あたしーあたし、いまのほうがこわい」

メアリイもやっと口がきけるようになっていました。そして、かあさんに、ローラが椅子をひっぱって、火が燃えうつらないようにしたのだと話しました。ローラはまだ小さく、メアリイとキャリーがすわったままでは、ただでさえ大きくて重い椅子がどんなに重かったろうにと、かあさんはびっくりしました。いったいどうやってローラがそれを動かせたのか、信じられないとかあさんはいいます。

「ローラ、おまえはとても勇気があったんだね」かあさんはいいました。でも、ローラは、ほんとうは、とてもこわかったのです。

（ローラ・インガルス・ワイルダー「大草原の小さな家」）

まず尚行がピッチャーになり、真一がバッターボックスに入った。キャッチャーは、高志、史郎たちが後ろをまもった。

「しっかり打ってくれよ。じゃないと、たいくつしちゃうからな」

史郎が大きな声で言った。真一はむねがどきどきだ。なんとかうまく打って、史郎をびっくりさせてやりたいと思った。

尚行は、スローボールを投げた。だが、真一がふりまわすバットは、ぜんぜんタイミングが合わない。

「もっと前にきてよ」と、真一は注文をつけた。

ピッチャーは、さっきよりもっと注意深く、下手からゆるやかにほうった。するとバットは、ボールをかすめて、からぶりした。

「いいぞ、もうちょい！」

だれかが声をかけた。真一は、背中がぞくぞくっとした。つぎにふったバットで、ボールは、てんてんと前にころがった。

「やったあ」と、真一はさけび、バットをほうりだして車いすをこいだ。史郎がグローブにボールをおさめて、ゆっくりとホームに返球した。キャッチャーが、がっちりつかんで「アウトー！」と、さけんだ。

真一は、やっと一るいに達しただけだったが、またからだがぞくぞくっとした。

こんどは、真一は守備にまわった。グローブをはめて、かまえてはみたものの、とても打球をとるのはむりだとわかった。だから魚あみ専門にした。

真一のところにとんでくる球は、車いすにぶつかってはねかえる。すると、車いすがさっと近づいて、あみでボールをすくいとる。まるでバッタでも追いかけているようだ。みんなは、それがおかしくて笑った。

ひとときがたって、みんな引きあげることになった。真一の新しいユニフォームには、すこし土のよごれがついた。真一は、とても満足していた。何といっても友だちといっしょにやる野球は、親子ふたりの野球とはぜんぜんちがったべつの満足感があった。尚行や史郎たちのほうも、いつもの野球とはちょっとちがう感じだった。でもこれはこれでおもしろいと思った。

家に帰ると、洋子がおやつを用意してまちかまえていた。テーブルには、クッキーやチョコレート菓子がならび、ガラス皿にくだものがもられている。みんなは、はじめ目を見合わせて、悪いからとえんりょしようとした。

「なに言ってるの、せっかく用意したのに食べてくれなくちゃ、おばさん悲しいわよ」

「じゃあ、いただきまーす」

洋子は、みんなのコップにジュースをつぎながら、

「どうもありがとうね、きょうのシンちゃん、ピカピカかがやいているわ」と言った。

「ぼく、大きいの打ったんだからね」と、真一はじまんげに言った。

「おばさん、ほんとにシンちゃんうまいんだよ」

尚行が言うと、史郎もクッキーを口にほおばりながら、

「ほんとだよ、ぼくもびっくりしちゃった。車いすで野球ができるなんてすげえや」

と言った。真一は、自分専用の白いカップに顔を近づけて、ふとい曲がったストローでうまそうにジュースを飲んだ。

（山県 喬「声援がきこえる」）

授業参観日だといって、こんなにきんちょうしたことは、いままでになかった。亜紀は、国語の教科書をつくえの上にだして、大きく深呼吸した。それから、ちらりとうしろをふりかえった。
教室のうしろには、もう五、六人のお母さんたちがたっていた。
（あ、エミーのパパだ）
ちょうど、うしろのドアからはいってきた背の高い男の人が、絵美のパパだった。亜紀は、この日のために国語の特訓につきあって、なんどか絵美の家へいっていたので、すぐにわかった。
きょうの授業は、絵美がこのまま桜本小学校にのこるか、アメリカンスクールへいかなければならないかがきまるだいじな授業だ。
（どうか、エミーのパパのまえで、特訓の成果がでますように）
と、亜紀はいのるような気もちだった。
『ことわざと生活』のところは、声をだして何回よんだだろう。きのうは、亜紀も声がかれるくらい、絵美といっしょに練習した。ことわざも、たくさんおぼえた。
亜紀は、絵美が気になって、なんどもふりかえってみた。絵美は、しんけんな顔つきで教科書をひらいていた。あまり亜紀がうしろをむくのでいつのまにかきていた亜紀のママが、黒板をさして、「まえをむいていなさい」というしぐさをした。
教室のうしろが、お父さんやお母さんでいっぱいになったころ、パリッとした背広をきた先生が入ってきた。
「えー、きょうは、十三ページの『ことわざと生活』を勉強します。みんな、どんなことわざを知っているかな？」
いつもは、わかっていても手をあげない人がおおいのに、授業参観の日は、みんながいっせいに手をあげる。亜紀も手をあげた。それから、もういちど、絵美をふりかえると、絵美もまっすぐに手をあげていた。
何人かが、知っていることわざを発表したあと、先生は、
「そうだね、それでは、教科書をよんでみようか」
と、教室をみまわした。
「中山さん、よんでみて」

まず、亜紀があてられ、それから、くぎりのよいところできりながら、六人が順番によみすすめた。そして、やっと、
「それでは、つぎは、高田さん」
と、絵美の名まえがよばれた。
「はい」
絵美は、はっきりとへんじをしてたった。そして、大きな声でゆっくりと教科書をよんでいった。はじめは、少し声がふるえた。
亜紀は、自分のときよりハラハラして、教科書の文字を目でおった。
「ですから、ことわざは……」
絵美の声がつまった。
「ことわざは……」
亜紀は心の中で、
「ニチジョウ、ニチジョウ！」
と、漢字のよみかたをさけんでいた。絵美が、ちょっと考えて、
「日常の生活のなかに……」
と、つづけたときは、ほっとした。

（松浦とも子「ライバルは転校生」）

村の伝兵衛さんの家に、子ねこが六ぴきうまれました。そのうち五ひきは、ほうぼうにもらわれていきましたが、親によくにためすねこだけは、もらい手がなくて家にのこりました。そして、一年ほどもたつと、どれが親だか子だか、家の人でも、ちょっとわからぬほど大きくなりました。

ある夜、村のわかい衆が、酒もりをしようと、伝兵衛さんの家にあつまりました。ところが町へ酒買いにいくことになると、だれもじぶんがというものがありません。すると、ちえじまんの伍一というわかものが、この親子ねこを見て、

「おい、みんないいことがある。彦一をよんできて、このねこの親と子を見わけさせようじゃないか。いかに彦一でも、ひと目でこれがわかるはずはない。しかし、まけん気の彦一は、けっしてわからぬとはいわぬから、まちがったら町へつかいにやろうじゃないか。」

といいました。それはおもしろいというので、むかえにやると、すぐ彦一がやってきました。伍一は親子のねこをまえにおいて、

「おい彦一、このねこはどっちが親で、どっちが子が見わけがつくか。もしうまく見わけたら、ここにあるおかしをみんなおまえにやろう。そのかわりまちがったら、おまえは町まで酒買いにいくんだ。」

というと、彦一は、へいきで、

「いいとも。」

と、こたえ、いろりのそばにあったさかなのほねを、二ひきのねこのあいだになげてやりました。二ひきのねこはいちどにとびかかって、そのほねをおさえましたが、一ぴきのねこが、うまそうにたべるのをじっと見つめています。

彦一はこのありさまを見て、

「さかなのほねをたべているほうが子どもで、見ているほうが親ねこだ。伝兵衛さん、そうであろうが。」

といいました。ほんとうにそうだったので、伝兵衛さんがかんしんしてうなずくと、彦一は、ことばをついで、

「なあ伍一どん、ねこだって親は子から先にたべさせる。親というものは、ねこだって子どもをこんなにかわいがる。ああ、ありがたいのは親だ。おれははやくかえって、このかしをおかあさんにあげよう。」

こういうと、まえにあったおかしをもって、どんどんかえってしまいました。

（小山勝清「彦一とんちばなし」）

むかし、からからにかわいた砂漠で、ある男が、十頭のラクダを水飲み場につれていこうとしていました。

しばらくあるいたところで、男は一頭のラクダの背にのり、あとなん頭いるか、かぞえてみました。ラクダは九頭しかいませんでした。男はあわててラクダの背からおりると、いなくなった一頭をさがしに、いまきた道をてくてくあるいてもどりました。

けれども、どこにも姿が見えません。きっといなくなってしまったんだ。男は、そう思ってさがすのをやめ、大急ぎでラクダたちのところへもどりました。

がっかりして、もどってきてみると、これは、またどうしたことでしょう。ラクダはちゃんと十頭いるではありませんか。大よろこびで、男は、そのうちの一頭の背なかにのりました。

ところが、しばらくすると、もういちど、数をかぞえてみたくなりました。九頭しかいない！男は、とほうにくれて、ラクダの背からおりると、またいなくなった一頭をさがしにいきました。どこにもいません。

男は、群れのところにとんでかえって、数をかぞえてみました。すると、おどろいたことに、十頭ぜんぶそこにいて、ぶらぶらあたりをあるきまわっています。

男は、これは砂漠の暑さのせいだと、もんくをいいながら、こんどは、いちばんうしろのラクダにのりました。そして、三度めの正直とばかりに、もういちど、のこりのラクダをかぞえました。さっぱりわけがわからない。また一頭たりなくなっている！　男は、悪魔をののしりながら、ラクダからとびおりました。そして、のろのろと群れのあいだをあるきながら、一頭ずつかぞえていきました。ちゃあんと十頭います。

「わかったよ、わかったよ、この根性まがりの悪魔め。」

と、男は吐きすてるようにいいました。

「のって一頭をなくすくらいなら、十頭つれてあるくほうがましさ！」

（ユネスコ文化センター編「アジアの笑いばなし」）

国家試験を目前にひかえた三人の受験生が、結果をうらなってもらいに、ある占師のところへいきました。

すると、占師は、なにもいわず、ただだまって指を一本立ててみせました。

結果が発表されてみると、三人のうちひとりだけが合格しており、おかげで、この占師の評判はぐんとあがりました。

占師のわかい弟子は、どうしてそれがわかったのか知りたがりました。

「成功の秘訣は、ものをいわぬことじゃ。」

と、占師はいいました。そして、それをきいた弟子がぽかんとしているのを見て、こうつけくわえました。

「いいかね、おまえは、わしが指を一本だしたのを見ておったろう。それは、三人のうちひとりだけが合格するという意味にも取れる。事実、そうなった。だが、もし、ふたり合格しておったとしても、わしの見立ては、やっぱりただしい。指一本は、ひとりおちるという意味にとれるからな。三人ともとおっていたとしても、指一本は、三人そろっていちどに合格という意味にとれる。その反対もおなじこと。どんなばあいも、わしはただしいんじゃ。」

（ユネスコ文化センター編「アジアの笑いばなし」）

一九七七年。初めてケニアのマサイ・マラ動物保護区をおとずれたとき、とてもふしぎに思う光景にぶつかった。

車を走らせていると、シマウマとトピがいっしょになって草を食べているかと思うと、シマウマとトムソンガゼルがいっしょになっているときもある。

わたしは、「せまい草原ならいざしらず、ここはかぎりなく広がる草原である。なにも同じ場所でいっしょになることもあるまい。べつべつにわかれて、のんびり食べればいいのに」と、思った。いっしょにいれば、同じ草をめぐって、うばいあいが起こるのではないかと考えたからだ。

ところが、草食の哺乳類たちは草をめぐってのあらそいを起こしていない。同じ場所で、それぞれの種がゆうゆうと草を食べていた。

それ以来、それぞれの種が草をどのように食べているのか、注意深く観察をするようになった。草の食べ方が、それぞれの種によってちがっていると思ったからだ。

同じく、マサイ・マラ動物保護区のサバンナを車で走っていると、三〇頭ほどのヌーと、二〇頭ほどのシマウマがまじりあうようにして草を食べていた。車を止め、わたしは両者の食べ方をくらべてみた。

シマウマのほうは、まだ穂のついている草むらの中にはいりこんで食べているのに対し、ヌーのほうは、草や茎がすでに半分以上も食いつくされたところにたって、シマウマの食い残しの部分をしきりに食べているのだ。すぐかたわらに、まだぜんぜん食べていない草があるというのに、どのヌーも、それには口をつけようともしない。背たけがみじかくなった草ばかりをしつこく食べつづけていた。

わたしは、ヌーの口のかたちに注意をした。横に広がり、いかにも、みじかい草を食べるのに適している。

そのうえ、ヌーの門歯は上あごにはなく、下あごだけにはえている。この門歯のつくりも、みじかい草を刈りとるのに適している。事実、ヌーはみじかい草をじつにたくみに刈りとって食べているのだ。

シマウマのほうは、穂のついた草も刈りとって食べている。シマウマのこの門歯は、ヌーとちがって、上あごにも下あごにもはえている。背たけの高い草も、シマウマには食べやすくなっているのだ。

シマウマとヌーは、同じ場所にいっしょにいても草をめぐってあらそいを起こすどころか、草をじょうずに食いわけていたのだ。自然は、いろいろな動物が、同じ場所で食べてくらしていけるようにつくりだしているのだ。

（黒田弘行「サバンナをつくる生きものたち」）

アフリカ・オーストラリア・南アメリカの三大陸には、肺魚というさかながいて、真水の中に住んでいます。肺魚という名まえからもわかるように、うきぶくろが、たいへん肺によく似ています。

肺魚も、ふだんは、えらで呼吸をしていますが、雨のない季節に水が干あがってくると、肺、すなわち、うきぶくろで、呼吸をするようになります。

南アメリカの肺魚は、自分の住んでいるぬまがかわいてくると、まず土にあなをほってはいりこみ、からだが水から出るにしたがって、うきぶくろで呼吸を始めます。土がすっかりかわいてしまいますと、からだがからからにかわかないように、ねばっこい液でからだをくるんで、ふたたび、雨の季節になるまで、じっとしています。

このように肺で呼吸することのできるさかなが、だんだん水から陸に上がってきて、やがて、すっかり陸上動物になってしまうことが、想像されないでしょうか。実際に三億年ぐらいのむかしに、空気を呼吸するさかなが、陸上と水中と両方で生活するようになって、両生類のなかまが生まれ出ました。

動物が陸上で生活するためには、陸上に植物がはえている必要があります。たとえ肉食の動物でも、そのえじきになる動物は、植物を食べているのだし、すみかや、かくれがとしても、植物が必要だから、植物がはえていなければ、動物は生活できません。

だから、どう考えても、陸上生物が生まれる前に、陸上植物が生まれているはずなのです。動物は、植物のあとをついて、水中から陸上に上がりました。

陸地に植物が大いにしげって、動物が住めるようになったときに、さかなから両生類が生まれたばかりでなく、それと前後して、サソリやこん虫、そのほかいろいろの陸上動物ができました。それが、今から三億年ぐらい前のことなのです。

（八杉龍一「進化の道しるべ」）

「もう少し、むこうのほうがいいわね。」
「このへんかしら……。」
きれいなポスターをはっているのは、お店の広告係の人です。
おおぜいのおきゃくに来てもらい、しなものをたくさん売るために、スーパーでは、いろいろなくふうをしています。
しなものを広告するためや、たのしいふんい気をだすためのポスターをつくって、お店にはるのも、その一つです。
クリスマスなど、一年の行事にあわせて、お店の中をきれいにかざりつけることもあります。
たのしそうで、きれいで、買いやすいお店にするために、お店では、いろいろなアイデアを考えます。
売るためのくふうの中でも、スーパーの人たちが、いちばんしんけんに考えるのが、特売品です。
毎日、おきゃくのよろこびそうな、安くてよいしなものを見つけだし、ねだんを安くして売りだすのです。
そのため、魚の係、肉の係、野さいやくだものの係の人たちが集まって、店長といっしょに、どんなしなものがよいか、特売品をきめる会議をします。いくら安くても、おきゃくがよろこばないものでは売れませんから、みんな、しんけんです。
こうして、特売品がきまると、入り口やけいじ板など、よくめだつところに、ポスターをはりだして、おきゃくに知らせます。
このスーパーには、自動車で買いものにくる人のためのちゅうしゃ場があり、あんないをする係の人がはたらいています。
店内がいつもきれいなように、そうじをする係の人もいます。
このお店は、朝の十時から、夜の十時まで開いています。
ですから、お店の人たちは、こうたいではたらきます。その人たちの、はたらく時間をきめる係の人もいます。
あした売りたいしなものを、本社へれんらくする係の人もいます。
このように、一つのスーパーのお店で、毎日、おおぜいの人が、いろいろなしごとをしています。
でも、スーパーではたらく人は、これでぜんぶではありません。お店とはべつのビルではたらく本社の人たちもいます。

（福生武「スーパーの一日」）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

わたしがおもしろいとおもったのは、「テレビで、現実にはできない経験があじわえるか」という質問にたいして、「そうおもう」があきらかに半数をこえ、「そうおもわない」のは四人に一人くらいでした。わたしたちが直接に体験できることは、かぎられているので、テレビがわたしたちにかわって体験させてくれること、また、テレビが現実以上に現実を劇的につくりあげて体験させてしまうことに、人びとはおそらく気づいていて、このような回答がでてきているのだとおもいます。

しかし、「テレビがあることで、生きかたや行動の手本がえられる」とこたえた人は過半数にとどかず、「そうおもわない」とこたえた人は三人に一人で、テレビで生きかたの手本をとかんがえているひとはおおいとはいっても二人に一人になりません。テレビを人の生きかたのうえでぜったいに重要なものとはかんがえていないといえるかもしれません。

この点は、「テレビはひとことでいえば、どんな感じのものですか」という質問にたいして、「あれば便利という程度のもの」というこたえが過半数をこえ、「なくてはならないもの」ということたえを二〇パーセントぐらいうわまわっていることからもこのことはうらづけされているようにおもわれます。

テレビの影響については人びとはどのように感じているのでしょうか。

テレビ、新聞、ラジオ、週刊誌などをひっくるめて、マスコミというよびかたがされていますが、そのようなマスコミ全体のなかでテレビの影響はどんな位置をしめているのでしょう？

まず、「衣食住など、人びとの生活のしかたに、いちばん影響をあたえているものは、どれだとおもいますか」という質問にたいしては、テレビをあげる人がまさに圧倒的におおく、それぞれ十パーセント以下の新聞、週刊誌、ラジオをはるかにひきはなしています。ところが、「政治や社会問題についての世論」については、テレビとこたえるものが約半数で、新聞とこたえるものとほとんどかわりません。この点では新聞の影響もおおきいと感じられているわけです。なお、週刊誌とラジオはたった一パーセント台でした。

さらに「マスコミがつたえていることは、ほぼ事実どおりだとおもうか」という質問にたいして、「そうおもう」が「そうおもわない」よりすくなくなっています。マスコミへの不信がかなりおおくみられているわけです。この点は、「どちらかといえば、いろいろな情報がありすぎて、まどわされることがおおい」という回答が三人に一人ぐらいはいるのと合致しているようです。

マスコミの報道がかならずしも事実をつたえていないとすれば、それにふりまわされるようなことがあってはならないということになります。いかがわしいとすれば、事実や真実をみきわめる必要があります。

人びとはマスコミへの不信をもちつつ、さらにそれにのせられる――うごかされる――ことに不安ももっているのです。

「人びとの意見は、知らないうちにマスコミのいうとおりにうごかされていることがおおいか」という質問にたいして、「そうおもう」が四人に三人ぐらいで、「そうおもわない」をはるかにしのいでおおくのこたえをよせています。

人びとがマスコミにたいして意外とおおく、批判的な意識をもっていることがわかります。これはだいじにしなければならない意識だとおもいます。

近年、テレビの社会的影響力についての専門的な研究の分野でも、テレビの影響が「強力」であるということがほぼ定説となってきています。わたしたちは、やはり、ひとりひとりがまず「テレビをみる目」をつくり、やしなうことが必要なのです。

（佐藤毅「テレビとわたしたち」）

このところ酸性雨が地球規模の環境問題となってきたのも、ヨーロッパを中心として、旧西ドイツ、オランダ、スイス、イギリス、デンマークなどで森林が大きな被害をうけていることが、テレビや新聞などで知らされてからです。これらの国では、森林面積の半分以上の木が、マツ枯れなどの被害をうけています。

カナダでは、シロップをとるカエデの木に、いちじるしい被害が出ています。ニューヨークのアジロンダックの山林地帯で、赤トウヒは林の半分以上が、すでにかれてしまいました。中国は一九七〇年にはいり工業化をすすめ、いまや年間一〇億トンの石炭をエネルギー源として燃やし、その結果、酸性雨によって四川省の美しい我眉山のスギがすがたを消しはじめ、その約九〇％が被害をうけています。

日本ではどうだったのでしょうか？　四日市石油コンビナートや水島などの近代公害よりも、はるかまえの公害の原点といわれた足尾製錬所周辺の森林は、大正初期までに六〇〇ヘクタールがはげ山となったのです。木を育て、木を切って生活する林業経営ができなくなった面積は、一六〇〇ヘクタールになってしまいました。秋田県小坂銅山では、一九一〇年ごろに森林の被害がひどくなり、被害面積は一一万五〇〇〇ヘクタールになったのです。また、茨城県の日立銅山は、一九一五年から一九二八年あたりまでに三万五〇〇〇ヘクタールに被害をもたらし、アカマツ林は一万ヘクタールがかれてしまいました。

愛媛県の別子銅山は、一六九一年に銅をほり、精練を始めました。明治のはじめには製錬工場を大きくしました。その結果、ムギやイネなどのあらゆる農作物、森林に大きな被害をおよぼしたのです。一八九九年のことですが、森林がかれ、はげ山となったところへ大雨となり、山くずれを引きおこし、五一三名のとうとい命がうばわれたのです。

山に木がなくなると、雨は地下へもぐらず、山はだをドッと流れだすので、洪水がおこります。あまりの被害のため、一九〇五年別子銅山は、四国の新居浜から瀬戸内海にうかぶ無人島の四阪島へ、製錬所をうつすことになりました。

新居浜から三〇キロメートルもはなれた四阪島へ工場をうつしたから、もう被害はないものと信じ、製錬を始めました。四阪島の工場のえんとつからふきだした大気汚染物質は、瀬戸内海の海上を、風にのって流れます。海の上をゆっくり流れながら、海面から蒸発した湿気に亜硫酸ガスなどがどんどんとけこみ、ガス体よりも濃度はこくなっていきます。ガスよりも毒の強い酸性のきりとなり、四国の海岸にやってきて、四国の陸地、山などにぶつかります。こうして、大気汚染物質とその酸性のきりは広がっていきます。

つまり、海の上は水平で、風速一秒間に三～四メートルのときは、着物を着るときの帯のようになって流れていくのです。三〇キロメートルもはなれた四阪島のえんとつから出た、大気汚染物質とその酸性のきりは、四国に上陸して、帯状から扇状になって広がります。濃度はうすまりますが、汚染物質は風の方向まかせで、四国の瀬戸内がわの海岸のいたるところを、おそうことになったのです。

（谷山鉄郎「酸性雨がふっている」）

空気のよごれ、つまり大気汚染を実感できるのは、まずお天気がいいのに見はらしが悪く、遠くが見えないとか、空が青くないというときでしょう。これは空気中をただようこまかいチリやススス（浮遊粒子状物質といいます）が原因です。この状態がひどいときはスモッグといわれます。

スモッグは目にみえる大気汚染ですが、目にみえない物質によってもたらされる大気汚染もあります。みなさんは光化学スモッグということばを聞いたことがあるでしょう。こちらは硫黄酸化物とかチッ素酸化物という目にみえない物質が原因です。

かつてはこうした大気汚染の原因となる物質は、主に工場の煙突から出るけむりの中にふくまれていました。それで工場を中心とした都市では、ひどい大気汚染が発生し、ぜんそくなどの病気がおこりました。

これはたいへんだということで、工場の煙突からはきれいなけむりしか出してはいけないということがきめられました。いまでは、煙突の下にけむりをきれいにする機械がついています。

それで、以前よりはましになったのですが、それでも都市の空気はよごれていますね。そうです、問題は自動車の排気ガスです。

もちろん、自動車の排気ガスも、きれいにして出すようにきめられています。ですから自動車の排気ガスは、昔とくらべるときれいになっています。

けれども、排気ガスは二酸化チッ素と呼ばれる物質がふくまれていて、これがいまの都市部の大気汚染の主な原因となっています。また、トラックやバスなどの大型のディーゼル車から出る黒いけむりも問題になっています。

自動車一台一台の排気ガスをきれいにする技術的なくふうはどんどん進められています。でも、自動車の数は、どんどんふえています。たとえば、一九九二年（平成四年）度末では、全国で六、四五〇万台（トラックやバス、バイクをふくみます）にもなっています。

その自動車の多くは、住宅街から都市の中心部への通勤に利用されたり、都市の中での移動に使われたりしています。また、人の移動のためだけではなく、さまざまな品物をお店などに納めることや、宅急便などでも使われています。

コンビニエンス・ストアなどは、大きなスーパーやデパートなどとちがって、それぞれの店の倉庫が広くないので、品物を補充する納品のための車が、一日に何回もまわっています。

こうしたこまめな配送のおかげで、わたしたちはつくりたてのおべんとうを買ってたべることができるのですが、その分、たくさんの自動車が走りまわっていることになります。

その結果、都市の中心部はもとより、住宅街の大きな道路でも、いつも渋滞がおこっています。渋滞がおこると、自動車は動いたり、とまったりをくりかえすことになります。

自動車は動きはじめるときにエンジンの回転数があがり、排気ガスが多く出ます。特に、トラックやバスなどの大型のディーゼル車ですと、ブワーッという感じで黒いけむりが出ます。ですから、スムーズに走っているときにくらべると大気汚染がひどくなるというわけです。

（阿部治・市川智史「ふくれあがる大都市」）

読解問題 7月4週分

問1　読解マラソン集1番「吾一はそとへ」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　吾一は、体が寒かったので、焼きいもをふところに入れてあたためていた

B　吾一は、もらった小づかいはできるだけ貯金するようにしていた

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集1番「吾一はそとへ」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　吾一は、二つあった焼きいもをいつのまにか全部食べてしまった

B　吾一は、おやつを食べていなかったので、特におなかがすいていた

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集2番「煙突の上のほうが、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　ローラは、火がこわかったが、自分にできることをしようとした

B　ローラの手は、やけどはしていなかった

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集2番「煙突の上のほうが、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　ローラは、かあさんがけがをしなったのがうれしくてたまらなかった

B　メアリイは、ローラの仕事を手伝おうとした

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集3番「まず尚行が」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　真一は、ときどき友達と車いすで野球をしていた

B　真一は、打つよりも守る方が得意だった

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集3番「まず尚行が」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　車いすの野球は、バットのかわりに魚あみを使うこともあった

B　真一は、一回しか打つチャンスがなかったがとても満足していた

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集4番「授 業 参観日だといって、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　亜紀は、今日の授 業によって、絵美といっしょにアメリカンスクールに行くかもしれなかった

B　亜紀があまりうしろをふりむくので、亜紀のママは近くに寄ってきて、「まえをむいていなさい」と言った

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集4番「授 業 参観日だといって、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　絵美は、国語の教科書を読むのが得意ではなかった

B　亜紀は、絵美に「日 常」の読み方を教えたかったが声には出さなかった

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

読解問題 8月4週分

問1　読解マラソン集5番「村の伝兵衛さんの家に、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　生まれた六ぴきの子ねこのうち、もらい手がなかったのは、親によくにたねこだった
B　伍一は、彦一が酒を飲まないことを知っていた
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集5番「村の伝兵衛さんの家に、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　二ひきの間になげてやったさかなのほねをたべたのは、子ねこの方だった
B　彦一は、おかしをもって家に帰った
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集6番「むかし、からからにかわいた砂漠で」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　十頭のラクダを水飲み場につれていくとき、男は途中からラクダの背に乗った
B　男は、いなくなったラクダを、ラクダの背に乗ったままさがしにいった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集6番「むかし、からからにかわいた砂漠で」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　国家試験が終わったあと、結果を知りたかった三人の受験生は占師をたずねた
B　占師が指を一本立ててみせたところを、弟子も一緒に見ていた
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集7番「一九七七年」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　ケニアでは、シマウマと、トピやトムソンガゼルが、べつべつの場所にわかれて、のんびり草を食べている
B　私は、草食の哺乳類たちが、種によって違う種類の草を食べているのだと思った
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集7番「一九七七年」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　ヌーが短い草を食べたあと、シマウマが背の高い草を食べていた
B　ヌーは、シマウマが食べ残した穂を拾って食べていた
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集8番「アフリカ・オーストラリア・南アメリカの」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　肺魚は、ふだんはえらで呼吸しているが、水がなくなるとうきぶくろで呼吸をする
B　アフリカ・オーストラリア・南アメリカの海には、肺魚というさかながいる
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集8番「アフリカ・オーストラリア・南アメリカの」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　大昔、両生類があらわれる前に、空気を呼吸する魚があらわれた
B　肉食の動物は、地上に植物がないときでも陸に上がって生活することができた
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

読解問題 9月4週分

問1　読解マラソン集9番「もう少し、むこうのほうが」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　おおぜいのきゃくに来てもらうために、スーパーでは物をたくさんおいている
B　スーパーの人たちが、いちばんしんけんに考えているのは、できるだけ高いものを安く売ってあげることである

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集9番「もう少し、むこうのほうが」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　ねだんを安くしても、おきゃくがよろこばないものは売れない
B　特売品がきまると、店内のあまり目立たないところにもポスターをはりだす
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集10番「わたしがおもしろいとおもったのは、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　テレビを、「あれば便利」という人が、「なくてはならないもの」という人よりも多い
B　多くの人が、生活のしかたにテレビの影響を感じている
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集10番「わたしがおもしろいとおもったのは、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　マスコミがつたえることは事実だと考えている人が多い
B　マスコミに対して批判的な意識を持っている人が多い
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集11番「このところ酸性雨が」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　ヨーロッパを中心として、酸性雨の大きな被害が出ている
B　中国では、国土の約九〇%が酸性雨の被害を受けている
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集11番「このところ酸性雨が」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　山に木がなくなると、酸性雨は更に激しくなり、酸性度を増す
B　別子銅山は、四国から瀬戸内海の無人島に製錬所をうつすことで公害を解決した
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集12番「空気のよごれ」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　目に見えない物質による大気汚染ほど、人間に対する被害が大きい
B　今、工場の煙突から出るけむりは、きれいなものにするようにきめられている
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集12番「空気のよごれ」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　自動車の排気ガスをきれいにする技術はできているが、その技術を使っていない車が多い
B　コンビニエンス・ストアができることによって、納品のための車は少なくて済むようになった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×